日本フランス語フランス文学会

cahier

20

septembre 2017

I 2017年度春季大会の記録

ワークショップ

1 Aléas de la réception de Saussure

Gabriel BERGOUNIOUX 松澤和宏
阿部 宏 金澤忠信 2

2 いま、パスカル・キニャールを読むこと
—— コレクション刊行をきっかけに

桑田光平 磯崎憲一郎
小川美登里 博多かおる 5

3 Entretien avec Antoine Volodine

Antoine VOLODINE
François BIZET SUZUKI Keiji 9

II 書評

アンドレ・ジッド、ピエール・ルイス、ポール・ヴァレリー（松田浩則・山田広昭・塚本昌則・森本淳生訳）『三声書簡 1888-1890』

吉井亮雄 13

I 2017年度春季大会の記録

特別講演 1

Michel Leiris, un poète au siècle de l'image

Pierre VILAR (Université de Pau et des Pays de l'Adour)

司会 郷原佳以 (東京大学)

in *Littéra* n°3 (à paraître)

特別講演 2

Les coulisses de l'édition de *Madame Bovary* dans la Pléiade

Jeanne BEM (professeur honoraire à l'Université de la Sarre)

司会 大鐘敦子 (関東学院大学)

in *Littéra* n°3 (à paraître)

特別講演 3

La Chasse spirituelle et les œuvres perdues de Rimbaud

André GUYAUX (Université Paris-Sorbonne)

司会 中地義和 (東京大学)

in *Littéra* n°3 (à paraître)

Aléas de la réception de Saussure

コーディネーター・パネリスト：松澤和宏（名古屋大学）

パネリスト：Gabriel BERGOUNIOUX (Université d'Orléans)、阿部 宏（東北大学）、
金澤忠信（香川大学）

2016年は、ソシュールの名前が冠せられている『講義』刊行100年にあつた。4人のパネリストがソシュールおよび『講義』の受容の諸相をめぐる発表をフランス語で行った後、ソシュールとギョーム、バンヴェニストとデリダの関係をめぐる議論が交わされた。4人のパネリストによる要旨は以下の通りである。

« Benveniste, lecteur de Saussure : formation d'une école française »

Gabriel BERGOUNIOUX

フランスにおける言語学的教育と研究が本格化したのは、19世紀後半に設立された高等研究院 *Ecole pratique des Hautes Etudes* においてであり、そこでの中心人物であったミッシェル・ブレアルによって若きソシュールはパリに招かれ、比較言語学の講義を担当することになった。ソシュールの弟子のなかに、のちにブレアルのコレージュ・ド・フランスの講座の後継者となるアントワヌ・メイエがいた。彼はソシュールの名前を引き合いに出すものの、『講義』の諸原理を授業で取り上げることはしなかった。

インド・ヨーロッパ諸語を対象とした比較言語学から構造主義的言語学への移行を果たしたのは、バンヴェニストの功績である。1939年以降彼がソシュールに言及した箇所を調べると、アメリカのボアズやサピア、あるいはトゥルベツコイ、ヤコブソン、イェルムスレウなどを通して『講義』の成果を個人的に摂取していったことが判明する。

形態論と記号学を主要な研究領域としたバンヴェニストは、同じ一般言語学において音韻論と統語論を重視したアンドレ・マルチネとしばしば対立したが、ラカンのセミナーに出席したり、レヴィ＝ストロースと *L'Homme* 誌の創刊に携わったりして、構造主義を代表する存在となった。彼の優れた業績は、話し手とラングを結びつけた言表行為論、およびコーパスではなく体系に基づいて

言語事実を概念化した点に求められよう。

« Sur un aspect de la réception française de Saussure »

松澤和宏

ソシュールの受容の問題を考える時、ソシュールの草稿や学生の聴講ノートをもとにして執筆された『講義』自体がすでにソシュールの思想に対する一つの解釈であり受容となっているという点を忘れてはならないだろう。1960年代以降のフランス的受容の特徴の一つは、『講義』を文献学的見地から検討しようとはせずに、もっぱら論者が（言語が知覚や思考を決定するという）言語決定論的思想の表明にソシュールを利用した点に求められよう。

『講義』第2部第4章言語価値の冒頭に、無定形な音と思想の混沌からの言語単位の発生を水面に一陣の風が吹いて生じる波に喩えた有名な一節がある。言語単位の発生はどの学生の聴講ノートでも混沌とした音と思想という二つの実体の「間」に生じると記されており、単位の区分を示す縦線は音と思想の間の非実体的な「媒介的な場」にあくまでも限定されている。ところが『講義』ではこの縦線は、言語外の二つの実体の領域にまで直接延長されており、言語単位の画定がそのまま言語外的世界の分節＝組織化に及んでいる。こうして『講義』のこの一節は、言語が言語外世界を直接構造化するという言語決定論を生む素地となった。ところがソシュールは純粹思惟の領域を草稿のなかで認めており、学生の聴講ノートには、言語的分節を主導しているのは音ではなく思想の方であり、話し手の意識であると記されている。

フランスでは1960年代以降言語決定論が『講義』に依拠しつつ一世を風靡するに至った。コレージュ・ド・フランスの開講講演でロラン・バルトは、ラングは言うことを妨げるのではなく、言うことを強いるファシズム的性質をもつものと見なした。ソシュールにとって、ラングは多様で混質的な言語現象にアプローチするために必要不可欠な方法論的虚構であったが、バルトは（フーコーとは異なって）ラングを、社会的制度的布置や文脈を捨象して、権力を内在させたものとして実体化してしまった。ラングに風穴をあける批判の武器として文学的エクリチュールを特権化する前衛的モダニズムの構図においては、日々の暮らしの中で交わされるパロールや常套句の孕む豊かさは見失われるほかなかったと言えよう。

« Les temps (*time et tense*) chez Benveniste »

阿部 宏

小説の地の文に現れる特殊な主観性現象を題材に、バンヴェニスト時制論に若干の提案を試みてみたい。

彼の時制論（1959）は言語研究のみならず、文学研究にも大きな影響を与え、今日でもこの両分野でバンヴェニストに言及する研究文献が量産されている。しかし、彼の時制論の基盤には彼の時間論（1965）があり、これが時制論の後に事後的に論文化されていること、また彼の時間論はイギリスの哲学者マクタガートの時間論（1908）に発想をえている可能性があることは、いまだ適切に認識されていないのではなからうか。

具体例において考えてみたい。Maintenant や ici が指示する時点や地点は、共発話者間の発話行為を基準にして決定される。発話行為がなされる時点が maintenant であり、なされる場所が ici である。この種の特殊な表現はダイクシスと呼ばれるが、原理的に会話に特化された表現といえよう。しかし、これら時空間ダイクシスは、小説の地の文にも実際に頻出する。これらが発話者の発話行為たる作者の執筆行為に基準点を求めるものでないことは明らかであるが、任意の登場人物や読者に基準点を帰する説明も成立しない。

バンヴェニストの「歴史／話」という二分法的発話行為論においては、「話」はその中で行われる発話行為であり、「歴史」はその中に発話者が不在で、その外に位置する発話者によって行われる発話行為ということになる。この説は、「歴史」の過去は「話」の過去とは、発話者からの時間的距離の遠近においてではなく、性質において異なることを明らかにした。「歴史／話」の区分は言語普遍的なものとも考えられようが、バンヴェニストにおいてこの発想が可能となった背景としては、フランス語においてたまたま単純過去と複合過去という2種類の過去時制が共存していること、またマクタガートの時間論があったのではなからうか。

しかし、上記の小説の地の文、つまり「歴史」中の主観性現象はこのバンヴェニスト説をもってしても、まだ説明不可能ではなからうか。そこで、「歴史」にはその中に発話者が不在なのではなく、むしろ疑似主体が潜在し、この疑似主体が時に疑似発話行為、つまり疑似「話」を行う、という仮説を提案した。

« Cinq Saussure ? »

金澤忠信

日本ではソシュールの名は『一般言語学講義』の世界初翻訳（1928年）以降知られている。特に1980年代に丸山圭三郎の紹介・解釈により「言語学者」としてだけでなく「思想家」としてのソシュール像が定着した。

1963年にバンヴェニストがソシュール没後50年の記念講演を行い、ソシュールの生前および次世代の言語学への功績について問うている。その際バンヴェ

ニストは『印欧諸語における母音の原初体系に関する覚え書』を引き合いに出し、ソシュールは言語学者としての出発点から終生「基本要素」の探求に従事したと述べている。そうしてバンヴェニストはソシュールの言語学を「記号論領野」と呼び、この「第一世代」を基礎として、「第二世代」の言語学である「意味論領野」を展開していくことになる。今日バンヴェニストのように『覚え書』からソシュールを読む研究者はおらず、ジュネーヴ大学でもサンスクリット語と印欧歴史比較言語学の講座はなくなり、ソシュール以来の知的伝統は途絶えてしまった。

このような状況において、バンヴェニストとは異なる仕方で、ソシュールを19世紀の文脈に置き直して読む可能性が提起されるべきである。エングラールによれば、1970年代半ばまでにソシュール像は四つの段階を経てきた。①『覚え書』の著者（生前）。②『講義』の著者（1916年以降）。③「死後の第二の栄光」としてのアナグラム研究。④伝説・神話研究。この「四人」のソシュールに「第五のソシュール」が付け加わる。1996年にジュネーヴのソシュール家で発見された新資料には、19世紀末の政治的状況に関する手稿が含まれており、そこでソシュールはポーア戦争、アルメニア人虐殺事件、ドレフュス事件などについて言及している。そもそも1894年の「ホイットニー追悼文」の草稿にはドレフュス事件および日清戦争に関する記述があったにもかかわらず、歴代のソシュール研究者はこれをほとんど顧みなかった。これらのテキストを読むことで、ソシュールを「知識人」として捉え直すことができるようになるのではないだろうか。

ワークショップ2

いま、パスカル・キニャールを読むこと

——コレクション刊行をきっかけに

コーディネーター：桑田光平（東京大学）

パネリスト：磯崎憲一郎（作家、東京工業大学）、小川美登里（筑波大学）、
博多かおる（東京外国語大学）

2016年12月から水声社よりパスカル・キニャール・コレクションの刊行が
はじめた。このコレクションは、キニャールのライフワークともいえる「最
後の王国」シリーズ（現在、フランス語で第九巻まで刊行）を中心に、最新刊
『涙』や小説『約束のない絆』、さらには短編集、ダンス論（『ダンスの起源』）、
イメージ論（『はじまりの夜』、原題 *La nuit sexuelle*）などを含むものである。
すでに多くの小説の翻訳が存在してはいるものの、「あらゆる形式」を駆使して
作り上げられている主著「最後の王国」シリーズが日本の読者のもとに届けら
れることで、作家キニャールの全貌が明らかになると言っても過言ではないだ
ろう。

若くしてルイ＝ルネ・デ・フォレにその才能を見出され、ボヌフォワ、デュ
ブーシェらによって創刊された雑誌『レフェメール』に難解ともいえる評論や
小品を発表することで作家としてのキャリアをスタートさせたキニャールだっ
たが、その後、出版社の原稿審査員をつとめながら、いかなるグループや流派
にも属すことなく、独自の文学世界を構築していった。歴史の時間と歴史以前
の時間—キニャールはそれを「往古（jadis）と呼ぶ—がもつれ合い、言語と沈
黙あるいは言語以前が溶け合うようなその作品世界は、ラテン語文化を中心
に古今東西のさまざまな文化に関する豊富な知識に裏打ちされたものであり、
その博覧強記が、時に読者を遠ざけてしまうことすらある。本ワークショップの
目的は、難解とも博覧強記とも言われがちなキニャールの文学世界に対してい
かなる接近が可能かを探ることにある。フランス国内外で高い評価を得ている
にもかかわらず、「ベストセラー」作家とはほど遠く、いわば「世界の片隅」と
しての書物を書き続けているこの同時代の作家を、遠く離れた日本の読者はど
のように読んでいるのだろうか。というよりも、果たして、そもそも読まれて
いるのだろうか。そのような問いが本ワークショップのもとにあった。それゆ
え、学会という場ではあるものの、パスカル・キニャールを研究対象としてア
カデミックに論じるよりも一つまり、ある意味で、すでに「死んだ」作家とし
て神聖化するよりも一、いわゆる「研究者」ではなく、作家なり批評家なり、
実作に携わっている人の意見を聞いてみたかった。そんな思いからコーディネ
ーターの桑田は、キニャール作品の愛読者である芥川賞受賞作家の磯崎憲一
郎氏に参加をお願いすることにした。磯崎氏は「キニャールならば」というこ
とで、快くこの申し出に応じてくださった。ここで改めて感謝の念を述べさせ
ていただきたい。以下、磯崎氏の発表に関してはコーディネーターである桑田
がその内容を報告させていただき、博多、小川両氏の発表に関しては、それぞ
れご本人からの報告をそのまま記載させていただく。

ワークショップは磯崎氏を皮切りに、博多かおる、小川美登里の順で発表を
行い、最後に登壇者で討論、そして会場からの質疑応答という手はずだったが、
発表の途中で登壇者や司会者が「つつこみ」のような質問を入れることもあり、

ワークショップそのものは和やかな雰囲気の中進行した。最初の磯崎氏の話は、参加をお願いしてよかったと心から思えるほど、刺激的かつ挑発的なものだった。磯崎氏は、キニャール作品をすべて読んでいるわけではない、と断りながらも、存命の作家で読むに値する海外作家は、ガルシア＝マルケス亡き後、自分にとってはキニャールくらいしかいないと述べ、そのキニャールとの出会いが保坂和志さんからの薦めであったと回想した。すぐにキニャール作品に引き込まれた磯崎氏は、なぜキニャール作品が面白いのかということ、『ローマのテラス』とコント集『謎』に収められた『舌の先まででかかった名前』の冒頭部分を例にとりながら、キニャールの文章がもつ特異な運動性と質感から説明した。因果性や論理性を担保する「接続詞」を極力削ぎ落としたキニャールの文章は、それゆえにゴツゴツした質感をもつことになるが、同時にまた、意味ないし論理がつながるかつながらないか不明なまま、一挙に次の文章に飛ぶ跳躍感も備えている。そこには、多くの作家に見られるように同時代の読者に理解してもらおうなどという配慮はない。こうした文章の紡ぎ方こそがプロット以上に、キニャールの作品を「小説的なもの」、すなわち小説にしかできないものに仕立てあげているのである。磯崎氏の発表に対して、すぐに登壇者の小川さんから、まさに「接続」を断ち切ることがキニャールの文学のひとつの核であることが確認された。キニャールの文章が、すでに死んだ作家のような文章である、という磯崎氏の指摘もまた、単に同時代の読者にむけられたものではないキニャールの文章の佇まいを的確に言い表していると思われた。

以下、発表順に博多かおる、小川美登里両氏の発表概要を記す。

パスカル・キニャール、不思議な水

博多かおる

パスカル・キニャールの作品において、伝説や引用の書き換えや変奏は「既聴感」の源の彼方を探る試みに読者を誘う。日常的な形態にあっても、母胎の中で泳いでいた時間、人類以前の時間などに誘う「水」のつながりを、その表れの数カ所からにすぎないが聞き、見ようと試みた。

岸や境界を探り、冥界へと魂を渡す川（音楽は時に亡霊を岸のこちら側に呼び戻す）の支流をたどって「川の思考」を紡ぐキニャールの作品において近年、海の占める面積は広い。地理的に、海はある地域を囲みながらも底で交わる水を喚起し、民族の感覚の根源的な不在、逆に言語の驚異を考える空間を広げる。また『約束のない絆』で語られるように、海の水は獣の毛皮や木の樹皮よりも古い時間を思い出させる。「パエストゥムの潜水者」のモチーフ、サイレーンの歌を聞こうと海に飛び込んだプテースの伝説を核とする「水に飛び込む者」のリトゥルネロを取り上げ、繰り返しが多様性を生み出すキニャール作品の特性

の一端を見た。ブテースの伝説は、飛び込む者が船の縁で踊ったという想像からダンス論を、怪物の歌の誘惑を退けつつも聞こうと策を弄したオルフェウスとの比較から音楽論を開く。サイレーンの歌に対抗し、過度に響きを増幅させて万人を動員する音楽と強迫音の脅威は『音楽の憎しみ』でも論じられ、それを逃れる必要性はキニャールにおける離脱の欲求と重なって、社会的な契約や権力から離脱する者の系譜を生み出している。飛び込む行為は、新しい冒険に飛び込む創作の身体性や、溢れる時間の水源に体ごと飛び込む読者の営みにも見られる。思索そのものが、現代性（アクチュアリティ）に縛られた時間の秩序を離れてアナクロニックな通時性に飛び込むことになる可能性も示唆されている。

強迫音の対極に位置しうる日常的な水音の音楽性は最新作にも聞かれ、ささやかな水と時間の関係の再考を誘う。たとえば、近年のキニャール作品に頻繁に現れ、人類の歴史より長く、藻と菌の間で光と水を交換し、離脱と共生の両立を地表に晒し続けている地衣類。涙という水。涙は鳥が持つ第二の臉の名残とされる人の目頭の襷にたまり、見たと思ったものの不在／不在なもののイメージという重要な主題を「アナクロニックな通時性」に結ぶ。読者は書かれていない光景を読んだように思う時、形象化されえないものが、テキストを読む第二の臉の名残にたまる水の源泉に映り、往古の水に反射する感覚、作者が「時間のショート」と呼ぶものを体験しているのかもしれない。

わが隣人、ツェランとクロソウスキー

小川美登里

エマニュエル・レヴィナスのもとで哲学を学んだパスカル・キニャールは、1969年ザッハー・マゾッホ論で文壇デビューする。その後、「最後の王国」シリーズ第一作『さまよえる影たち』で2002年のゴンクール賞を勝ち取り、小説家として認知されるまでの道のりは決して短くなかった。だが、平板とは思えないこの道程こそが、キニャールの作家としての独創性（オリジナリティ）の証であり、彼が**単なる**小説家の枠に収まりきれない存在であることを物語っている。

マゾッホ論を出版したとき、将来小説家になるなどキニャール自身、夢にも思っていなかっただろう。師であるレヴィナスをはじめ、当時、彼の周りには雑誌『レフェメール』の関係者たちがいた。そのひとり、詩人で翻訳家のパウル・ツェランから、古代ギリシアの詩人リュコフロン『アレクサンドラ』の翻訳を勧められたキニャールは、その冒頭句「*Lexo*」（「私は語るでしょう」）に導かれるように、丸一年かけて『アレクサンドラ』の翻訳に取り組んだ。のちにキニャールは当時を回想し、無為のパロールへと運命づけられたアレクサ

ンドラ（悲劇の預言者カッサンドラの異名）に託された冒頭詩句「*Lexo*」こそ、収容所から帰還し詩作活動を続けたツェランがみずからに課した運命であり、1970年四月に自死した詩人が若き友に遺した文学的遺言だったと思いたい。一方、預言者アレクサンドラの物語は、純粋な衝動によって溢れ出る言葉が聴衆にとっては呪われた真実でしかないという事実をあらわにする。キニャールにとって、アレクサンドラの言葉は文学の隠喩なのだ（「文学の核をなすもの、それは嘘ではなく、虚しい真実である」）。「虚しい真実」は社会から抹殺される。だからこそ、文学が生き延びる場所は沈黙であり、エクリチュールの内部なのだ。

嘲弄する民衆に向かってみずからの非業の死の瞬間を預言したとき、アレクサンドラはアレクサンドラではなかった。彼女は、湧き上がる声に震える喉と語る口を貸しただけだ。文学において語るのは「私」ではなく、つねに「誰か」である。「仮面をつけて語る」という意味の「翻訳」（＝背後から語る）が、キニャールにとって創作活動の核とみなされる理由はここにある。本発表では、若きキニャールが翻訳の師と仰いだピエール・クロソウスキーにも触れ、後者が「ダイヤモンド」と呼ぶ媒体（＝実体なきメディア）をキニャールがエクリチュールの場とみなしていたことを確認した。

ワークショップ3

Entretien avec Antoine Volodine

Invité : Antoine VOLODINE (écrivain)

Modérateurs : François BIZET (Université de Tokyo),

SUZUKI Keiji (Université de Tokyo)

La présence de l'écrivain Antoine Volodine au Japon, en résidence à la Villa Kujoyama de Kyoto, nous a donné l'idée de l'inviter à s'exprimer, pour la deuxième fois à l'Université de Tokyo, sur l'univers romanesque qui est le sien, et auquel il a donné le nom de « post-exotisme ». Trois de ses livres ont été traduits en japonais : *Alto solo* (アルト・ソロ, 1995), *Des anges mineurs* (無力な天使たち, 2012), et *Vue sur l'ossuaire* (骨の山, 2015). L'objectif était de présenter une œuvre marquée par

l'hétéronymie, d'interroger l'auteur sur son tropisme asiatique et sur son expérience actuelle du Japon, et d'aborder un thème central de son œuvre : la prison et l'imaginaire carcéral.

Interrogé sur la genèse de cet édifice à plusieurs voix (ce n'est en effet pas moins de quatre noms qui se partagent aujourd'hui la production post-exotique, chez sept éditeurs différents), Antoine Volodine a précisé que le projet était précoce : bien avant de publier son premier roman (*Biographie comparée de Jorian Murgrave*, 1985), l'auteur avait imaginé de rassembler l'« anthologie d'une littérature imaginaire » qu'il appelait alors « littérature de la Renaissance », où plusieurs auteurs constitués en « communes », en « commandos » ou en « fractions » racontaient le retour de l'humanité après plusieurs millions d'années d'extinction. À la suite de la publication de ses quatre premiers romans dans une collection de science-fiction (éditions Denoël), Antoine Volodine a eu l'occasion de sortir de ce qu'il appelle « un ghetto » où il se sentait « étranger », pour les Éditions de Minuit. *Lisbonne dernière marge* (1990), porte les traces de cette anthologie inaugurale. Entre-temps, le projet s'était « affirmé publiquement et textuellement » : il se manifeste désormais en un déploiement de formes narratives nouvelles, proprement post-exotiques, en marge du roman — le narrat, la shagga, le romãnce, entre autres. Il est en cela devenu une « performance littéraire et artistique » qui n'a cessé de se développer tout au long des années 90 et 2000, avec la complicité des éditions École des Loisirs, qui ont accueilli Manuela Draeger et Elli Kronauer, des éditions de l'Olivier (Manuela Draeger), et Verdier (Lutz Bassmann). Cette architecture polyphonique bat en brèche la conception classique, classificatoire, de l'auteur et lui substitue l'idée d'un « collectif d'auteurs », dont chacun toutefois possède une voix et des thématiques propres : « une spécificité », accorde Volodine. La multiplication auctoriale post-exotique entretient donc une parenté avec celle mise en œuvre par Fernando Pessoa, dont la passion hétéronymique a été évoquée par François Bizet, tout en s'en distinguant essentiellement.

Le contexte de cet entretien amenait tout naturellement à demander à Antoine Volodine de s'exprimer sur l'attraction qu'exerce l'Asie dans ses livres. L'auteur a d'abord évoqué ses années de formation au moment de la Guerre froide, et l'importance qu'a eue alors la Russie, l'Extrême Orient soviétique, en rupture avec la culture européenne. La pratique assidue de plusieurs arts martiaux (*kendô*, *judô*) l'a également rapproché du Japon. Mais c'est l'expérience directe qu'il a eue en Chine, et particulièrement à Macau où il a résidé plusieurs années, qui a été déterminante. En témoignent deux livres, parus respectivement en 1996 et en 2009 : *Le Port intérieur* et *Macau*. D'un point de vue plus littéraire enfin, Volodine a insisté sur la découverte décisive du *Livre tibétain des Morts*, ou *Bardo Thödol*, dont l'empreinte est omniprésente dans la structure narrative d'une grande partie de l'œuvre, et qui permet

au récit de se ressourcer jusque dans la mort des personnages (*Bardo or not Bardo*, 2004 ; *Terminus radieux*, 2015). C'est d'ailleurs la volonté d'introduire une autre réalité religieuse, le *shintô*, dans la fiction post-exotique, qui a amené Antoine Volodine à demander une résidence de six mois à la Villa Kujoyama, même si, au terme de ses investigations, il juge difficile d'intégrer à son univers cosmopolite une pratique spirituelle fortement marquée de sentiment national.

L'intérêt de l'auteur pour la culture japonaise est ancien. Il a pu se manifester concrètement dans un opus de Lutz Bassmann, *Haïkus de prisons* (2008), dont Antoine Volodine tient à préciser qu'il s'appuie sur une « technique apparentée » au haïku original. Il n'est en effet pas question de reprendre la forme canonique et ses contraintes, mais de recourir à de brèves notations afin de reconstituer une atmosphère, celle d'un goulag, et de construire un récit. À l'occasion d'un rapprochement proposé par Suzuki Keiji avec le poète Ishihara Yoshiro, qui eut l'expérience des camps sibériens, Antoine Volodine explique l'importance du travail de documentation (pour ce livre mais aussi pour *Écrivains*, 2010), ainsi que de la lecture des grands textes de l'expérience concentrationnaire (Chalamov). Si ses livres ne s'apparentent pas à cette littérature, ils constituent un « témoignage de témoignage », un « hommage aux témoins ». Les auteurs imaginaires qui les élaborent sont eux aussi issus d'un peuple écrasé, méprisé, opprimé : ceux que l'on croise partout dans les fictions post-exotiques sous le nom d'« *Untermenschen* ».

Restait à interroger Antoine Volodine sur le second de ses projets japonais : solliciter des réponses aux questions qu'il se posait quant au régime carcéral des prisonniers spéciaux, en vue de l'écriture d'un roman dont le personnage principal serait une détenue d'un mouvement politique extrémiste. Les multiples contacts qu'il a noués avec des responsables pénitentiaires ne lui ont malheureusement pas permis d'envisager de poursuivre dans cette voie : tout ce qui concerne en effet ces prisonniers hautement surveillés demeure secret, et il lui a été impossible d'obtenir les détails qui lui auraient permis de conduire sans erreur une fiction.

L'entretien s'est conclu sur une réflexion d'ordre plus sociologique et historique. À la question de savoir si le post-exotisme reflète la réalité de nos sociétés punitives, dont on sait qu'elles emprisonnent, au niveau mondial, de façon de plus en plus sévère, et dans des conditions de plus en plus inhumaines, un nombre grandissant de personnes issues en majorité de milieux défavorisés (cf. Didier Fassin, *Punir, une passion contemporaine*, 2016), Antoine Volodine insiste sur l'augmentation non moins exponentielle des camps, tout au long du XX^e et du XXI^e siècles : camps de concentration, d'extermination, de travail, et aujourd'hui, en Europe même, de réfugiés. Cette réalité des camps, ainsi que celle des guerres civiles et des guerres ethniques, est une préoccupation constante du post-exotisme, depuis l'origine. Elle rappelle la

« défaite de l'humanisme » sur laquelle repose tout cet édifice littéraire, dont l'auteur avoue qu'il est d'ailleurs en passe de s'achever : comme les 49 stations du Bardo, il comprendra 49 titres. Du livre qui en conclura l'aventure, les derniers mots sont d'ailleurs déjà écrits : « Je me tais ».

II 書評

アンドレ・ジッド、ピエール・ルイス、ポール・ヴァレリー（松田浩則・山田広昭・塚本昌則・森本淳生訳）『三声書簡 1888-1890』、水声社、2016年

評者：吉井亮雄（九州大学）

「作者」から切り離された「テキスト」の自律性がいかほど声高に唱えられようと、作家の個人的な書き物はこれら両者がけっして無縁の関係ではありぬことを雄弁に証言している。そのような認識のもと、1990年代以降、堰を切ったように作家の日記や自伝・回想録、書簡集の出版が盛んになった。とりわけ書簡集にかんしては、ただ作家側の手紙だけではなく、文通相手のそれを合わせた往復書簡集の作成により、一通一通がもつ多面的・対話的な意味合いを探ろうというのが今日の主流となっている。書評対象本は、文通者がいずれも書くことを生業とする者であり、しかも三者間のやりとりである点で、まさにその好個の例と呼んでさしつかえない。

邦訳が底本とするのは、『新フランス評論』関係の書簡集の編纂・校訂で定評のあったピーター・フォーセットとパスカル・メルシエ（ともに故人）が2004年にガリマール社から公刊した『三声による書簡集 1888-1920』。計1,285通にのぼるジッド、ルイス、ヴァレリー三者間の書簡に、補遺として関連の未刊書簡や資料を添えた1,700頁近い大著である。

原著は手紙の書き手に応じて三つに大別される。第一は1888年5月から90年5月までで、やりとりはジッドとルイスの二声のみ（「君／僕」の親密な呼びかけ）。第二は90年6月のヴァレリー登場から、95年6月のジッド、ルイスの絶縁まで。ここでは二人の友人に対するルイスの呼びかけの使い分けが対照的である（ジッドとは「君／僕」、ヴァレリーとは「あなた／私」）。最後の95年7月から1920年10月までは、ルイスとヴァレリーの二声となり、互いの呼びかけはやがて「君／僕」へと変化する。

さて本邦訳は、表題が謳うように、最初期2年半ほどの189通を訳出したもので（記述量としては全体のおよそ4分の1）、巻頭にはメルシエの透徹した原著序文を掲げており、これによって読者は書簡集全体の流れや特質も十分に把握・理解できる。部分訳とはいうものの、本書自体がすでに700頁の大冊であり、読み応えのほどは申し分ない。また訳者がコーパスとしてこの時期を選定したのは妥当かつ賢明な判断であった。やがてフランス文学における重要な書き手へと成長してゆく三者の知的友情の開始と、彼らの文学的出立の経緯とを

つぶさに物語る書簡群だからである。

若きナルシスたちは「書くこと」で自己の探求を目指していた。ジッドは従姉マドレーヌとのもどかしい恋愛のなかで『アンドレ・ワルテルの手記』の執筆に苦吟している。ルイスは処女詩集の完成にむけて理論・実作両面での努力を続けている。そしてモンペリエで新たな文学に飢えていたヴァレリーは彼ら二人と知り合い、首都の文芸思潮とかかわりを持ちはじめる。そういった個々の事情を背景に文通は始まるが、特筆に値するのは、これまでごく一部しか知られていなかったルイスの送受信すべてを活字化したことであろう。とりわけ最初期に限定した邦訳では、彼とジッドとの波乱に満ちた友情の最盛期、ヴァレリーの登場による友愛と嫉妬のドラマ、すなわちルイスを軸とする最も初々しく、最も熱を帯びた「三声」の有り様がなおのこと鮮明に浮かび上がる。

彼らの精神的風土を直截に言い表すタームは「芸術至上主義」である。「芸術は芸術自身以外の目的を持ってはいけない」とジッドがルイスに語れば、ルイスは「私たちは全生涯をかけて〈芸術のための芸術〉を守るために戦っている」とヴァレリーに述べる。ヴァレリーも「〈美〉の礼賛とそれ以外のものに対する軽蔑」を語ってルイスの信条に共感を示す。世紀末は既成の宗教に代わり「芸術という宗教」が隆盛した時代であったが、彼らもまた芸術に新たな信仰の拠りどころを求めたのである。一見すると奇妙に思えるが、ジッドとルイスが先を争うようにグランド＝シャルトルーズ修道院への隠遁を願うのも、あくまで芸術上の禁欲と法悦とを求め味わわんがためであった。

三者の手紙は、ユゴー、フローベール、ゴーティエ、ボードレール、マラルメをはじめ、多くの先行作家・詩人の名を挙げ、時にその作品の一節を引きながら、互いの文学観を照らし合う場として機能する。言及された作家や作品の広がりには、三段組の巻末索引が30頁に及ぶことから容易に窺えよう。

さらに手紙は文通者が自作を初めて他者に開陳し、それに対し相手方が各人各様の評価・批判を表明する場ともなる。ジッドとルイスは互いの作品を褒めることもあるが、おおむね意見は噛み合わず議論は平行線をたどる。とはいえ得がたきライバル同士として創作意欲を刺激しあう間柄ではあった。両者とも構想中の作品について語るよう請うているのがその顕れである。いっぽうルイスとヴァレリーの関係はともに和するものであり、韻文に傾倒し「形式」を賛美する点でも共感しあう場合が多い。

最後に贅言ながら――。ジッドとヴァレリーの往復書簡集は、その増補改訂版が別途準備されていたため、版元の意向により原著には収められなかった(5年後に公刊された同版や二宮正之氏による旧版邦訳の併読が望まれる所以である)。1890年末までに時期を絞った本邦訳もこの方針に倣っているが、厳密な意味での「三声」の開始を告げる同年12月後半の5通については、事情が許すならば編入・採録という選択もあったのではないだろうか。

とまれ本書は、瑞々しい訳文、原注を補う適切な訳注、正確な固有名表記が

見事に相俟ってフランス文学、さらには近代文学全般を考えるうえでの第一級の資料となった。訳者の功を称え、同書の出版を心より慶賀したい。

書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では学会広報誌 **cahier** および学会ウェブサイトにて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。なお、ご推薦いただいた本は研究情報委員会で集計し、書評する本を決定させていただきますので、必ずしもご推薦いただいた本の全てが書評されるわけではありません。

◇ 目的 日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。

◇ 書評の対象 原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。

◇ 推薦要領 学会員による他薦を原則とします。著者名・書名・出版社名・発行年月を明記の上、紹介文(200字程度)を付してください。著作のみの送付については対応し兼ねますので、ご遠慮ください。

◇ 締め切り 毎年3月・9月末日

◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：
cahier_sjllf@yahoo.co.jp

また、学会ウェブサイト **cahier** 電子版の「書評コーナー」に掲載する書評も以下の要領で募集しております。

◇ 目的および 書評の対象 上記の書評対象本と同じ。

◇ 執筆要領および締め切り、原稿送付先 学会員による他薦の書評あるいは自薦の自著紹介で、著書名・書名・出版社名・発行年等を除いて800字以内の原稿を随時受け付けておりますので、上記の宛先にお送りください。

なお、これらの書評のうち **cahier** にも掲載するに相応しいと委員会で判断したものについては、他薦の場合は **cahier** 用に2000字程度に手直しをお願いすることがあります。また、自薦の場合は委員会で執筆者を選定して依頼します。

cahier 20

編集 研究情報委員会

発行日：2017年9月1日

日本フランス語フランス文学会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館 505

TEL：03-3443-6671 FAX：03-3443-6672